Close up 笹川生

二度の日本留学
——ある臨床医の研究への歩み



李 君鵬 Junpeng LI
吉林省人民医院救急外科 副主任医師
（日中笹川医学奨学金制度第 39 期、44 期研究者）

2017 年と 2022 年、私は二度にわたり仙台にある東北大学で学ぶ機会を得た。二度の渡航の間には五年の歳月がある。一度目は、臨床現場の第一線で働く三十代前半の若手医師だった。二度目は四十歳を目前にし、再び体系的な教育・訓練の場に身を置く博士課程の学生としてであった。五年という時間は決して長くはない。しかし、その間に歩んだ道のりと経験の積み重ねが、二度の留学にそれぞれ異なる意味を与えていた。

最初の留学で得たもの

2017 年の春、仙台の桜が満開を迎える頃、私は初めて東北大学のキャンパスに足を踏み入れた。吉林省人民医院からこの地を訪れ、日中笹川医学奨学金制度第 39 期研究者として、亀井尚教授の指導のもと、一年間の臨床研修を行った。

病棟に入った最初の数日間は、これまでの臨床経験と比べて大きな違いは感じなかった。しかし診療に深く関わるにつれ、いくつかの細やかで、しかし本質的な違いが少しずつ見えてきた。カルテの記載では、情報を整理し論理的に記述することがより重視され、患者とのコミュニケーションも、より慎重で節度あるものであった。また、臨床判断において不確実性を明確に示す姿勢も強く印象に残った。これらは特別に意識されることなく、日々の診療の細部にまで浸透していた。



亀井先生と（2017 年最初の留学）

亀井教授の指導のもと、私は回診や症例検討に参加し、教授がどのように情報を整理し、複雑な状況の中でどのように判断していくのかを間近で学んだ。特に強く印象に残ったのは、特定の技術や手技ではなく、結論を出す前に、まず情報を段階的に整理・分析していくという問題解決への取り組み方だった。

この一年間の経験を通して、私は臨床そのものに対する理解を新たにした。帰国の際、亀井教授は「また機会があれば仙台に来てください」と声をかけてくださった。当時の私は、その言葉が数年後に現実になるとは思ってもいなかった。

臨床から実験室へ

2018 年に帰国した後も、亀井教授と連絡を取り合いながら、学術的な交流を続けていた。亀井教授が中国側の指導教官の招きで長春を訪れ、学術活動に参加された際には、私は接遇を担当し、直接議論を交わす機会にも恵まれた。

そして 2022 年、私は日中笹川医学奨学金制度第 44 期研究者として再び仙台を訪れ、博士課程で研究に取り組むことになった。再会した際、亀井教授が最初にかけてくださった言葉は、「ようやく戻ってきましたね」だった。

二度目の留学では、病棟ではなく実験室に身を置くことになった。その変化は、想像していた以上に大きかった。これまで十数年にわたり私を支えてきたのは、身体所見や画像所見をもとに限られた時間の中で迅速に判断する臨床経験だった。しかし実験

室では、そうした経験がそのまま実験技術として活かせるわけではなかった。

細胞培養、ウエスタンブロット、PCR――それまで論文の中でしか見たことのなかった技術が、日々の研究の一部となった。臨床とは異なり、実験の結果はすぐに得られるわけではなく、手技の安定性と再現性に大きく左右された。最初の数か月は失敗の連続だった。細胞の状態が安定しないこともあれば、操作の細かな違いによってRNAが分解してしまうこともあり、再現性も低かった。こうした問題は一つの原因では説明できず、複数の工程を一つひとつ繰り返し確認し、原因を探っていく必要があった。病棟では、直接問題点を観察し、検討することができる。しかし実験室では、多くの重要な問題点が「見えないところ」に潜んでいる。この違いに慣れるまでには、長い時間を要した。

ある夜、私は一人で実験室に残り、思うような結果が得られなかったデータについて、何度も実験を繰り返していた。フロアにはほとんど誰も残っておらず、操作手順を一つひとつ確認してもなお、原因を特定することはできなかった。その疲労は、一度の失敗から生じたものではなく、終わりの見えない不確実性の中に長く身を置いていることによるものだった。

翌日のディスカッションで報告を終えると、亀井教授は静かにこう言った。「臨床医は、一人の患者の治療がうまくいかなかったからといって、医療をやめたりはしないでしょう。研究も同じですよ」。その言葉は決して特別なものではなかった。しかしその瞬間、張りつめていた心がふっと緩むのを感じた。

臨床と研究のあいだで

博士課程での研究を通して、私は次第に、臨床の経験は決して失われたのではなく、新しい環境の中で別の形で活かされているのだと感じるようになった。

ある実験において、私たちは予想とは異なるデータを得た。通常であれば、このようなデータは除外される可能性が高い。しかし解析を進める中で、私は臨床で経験した類似の現象を思い出し、そのデータを別の視点から解釈してみることにした。その判断に最初から確信があったわけではない。しかし、後の検証によって、この一見「異常」に見えたデータが、研究を前進させる重要な手がかりとなった。



亀井先生と（2026年3月博士学位取得記念に）

このような経験は決して多くはない。しかし私は次第に、臨床と基礎研究は互いに影響を与え合い、補い合う関係にあることを悟った。

そして帰路へ

2026年春、私は博士課程を修了した。卒業式の日に、再び亀井教授と写真を撮った。2017年に撮影した写真と比べて外見は大きく変わっていない。しかし、人生は確かに新しいステージへと進んでいた。

四十歳を過ぎて再び体系的な研究の世界に入り、臨床から基礎研究へ、そして両者が交わる領域へと進む――これは一時的な思いつきではなく、長い時間をかけて考え、経験を積み重ねる中で、少しずつ形になっていった人生の選択だった。

仙台を離れる日、桜は変わらず満開だった。同じ季節でありながら、そこに込められた意味は、すでに以前とは違っていた。

十年以上にわたる学びと成長の歩みは、私自身のキャリアの軌跡であると同時に、日中医学交流の深化を映し出す一つの縮図でもある。変わるものと変わらないものとの間で、決して変わることなく残り続けたのは、一人の臨床医として医学の本質を問い続け、探求し続けたいという思いだった。



两渡东瀛
—— 一位临床医生的科研之路

Close up
笹川生

李君鹏 Junpeng LI
吉林省人民医院急诊外科 副主任医师
（中日笹川医学奖学金项目第 39 期、44 期研究员）

2017 年与 2022 年，我先后两次来到仙台的东北大学。两次出发之间，相隔五年。第一次，我是来自临床一线的见习医生；第二次，年近四十，是作为重新进入训练体系的博士研究生。五年的时间，跨度并不算大，但其间走过的道路与经历的变化，让这两次赴日求学在意义上渐次分明。

第一次留学所得

2017 年春天，正值仙台樱花盛开之际，我第一次走进东北大学的校园。彼时三十出头的我，从吉林省人民医院来到此地，作为第 39 期中日笹川医学奖学金项目的学员，在亀井尚教授指导下，开始了为期一年的临床见习。

初入病房的那几天，并未感到明显的不适应，诊疗流程与既往经验大体相似。然而，随着参与逐渐地深入，一些细微而深刻的差异开始显现：病历书写更强调结构与逻辑，医患沟通更为克制而审慎，临床决策中对不确定性的表达也更加明确。这些差异并不张扬，却贯穿于日常工作的每一个细节。

在亀井教授的带领下，我参与查房与病例讨论，观察他如何梳理信息并在复杂情境中形成判断。令我印象最深的并非某一项具体操作，而是一种处理问题的方法 -- 在得出结论之前，先对信息进行有层次的梳理与分析。



与亀井教授（2017 年第一次留学之际）

这一年的经历让我对临床实践本身有了新的理解。临别时，亀井教授对我说：“以后有机会，再来仙台。”当时的我并未意识到此话会在数年后成为现实。

从临床到实验室

2018 年回国后，我与亀井教授之间的联系并未中断。此后几年，我们一直保持着学术交流。其间，他曾应中方导师邀请赴长春参加学术活动，我作为对接人员参与接待，并与他进行面对面的深入讨论。

2022 年，我第二次来到仙台，以第 44 期笹川生的身份攻读博士学位。他见到我的第一句话是：“你终于又回来了。”

这一次，我不再进入病房，而是进入实验室。身份的转变，比预想中更为明显。过去十余年，我依靠的是临床经验：体征、影像以及在时间压力下迅速作出判断的能力。而在实验室，这些经验并不能直接转化为操作层面的优势。

细胞培养、Western blot、PCR——这些方法过去只存在于论文之中，而如今却成为日常工作的一部分。与临床不同，实验的结果并不即时呈现，它更依赖于过程的稳定性与重复性。最初几个月，实验失败频繁出现：细胞状态不稳定，RNA 因操作细节而降解，结果重复性差。这些问题往往无法通过单一原因解释，需要在多个环节中反复排查。

在病房中，问题通常是可以被直接观察与讨论的；而在实验室中，许多关键步骤发生在不可见的过程中。这种差异，使适应过程显得格外漫长。

有一晚，我独自在实验室重复一组结果不理想的数据。整层楼几乎已空无一人，我逐一核对每一个操作步骤，却依然无法确认问题所在。那种疲惫并不源于某一次失败，而是来自于持续存在的不确定性。第二天讨论时，亀井教授听完我的汇报后，只平静地说了一句话：“临床医生不会因为一个病人的疗效不好

就放弃行医，研究也是一样。”这句话并不复杂，却在那一刻，让我原本紧绷的状态慢慢松弛了下来。

临床与科研之间

博士阶段的训练，使我逐渐意识到：临床经验并未被替代，而是在新的环境中以另一种方式发挥作用。

一次实验中，我们得到了一组与预期不符的数据。按照常规，这样的结果往往会被舍弃。但在分析过程中，我联想到临床中曾见过类似的现象，于是尝试从另一种角度解释这一组数据。这一判断起初并不确定，但在后续验证中，这组看似“异常”的数据，反而成为推动研究的重要线索。

这样的经历并不频繁，却让我逐渐理解：临床与基础研究之间是一种可以相互启发、彼此验证的认知过程。

归　程

2026 年春天，我完成了博士阶段的学习，在毕业典礼上与亀井教授再次合影留念。与 2017 年的那张照片相比，外表并无太大变化，但人生阶段已截然不同。



2026 年 3 月拿到博士学位与亀井教授合影留念

四十岁之后重新进入有系统的研究体系，从临床走向基础研究，再回到医学的交界处，这并非一时冲动，而是在不断思考与积累之后，逐渐变清晰的人生选择。

离开仙台那天，樱花依旧盛开。同样的季节，但所承载的意义，已经不同。

这段跨越十余年的求学与成长之路，既是我个人专业轨迹的延伸，也是中日医学交流与合作不断深化的一个缩影。在变与不变之间，始终未改的，是一名临床医生对医学本质的执着追问与不懈探索。

